

A.ロマニウク=柴田俊幸:サラバンドによるファンタジア (J.S.バッハ《無伴奏フルートのためのパルティータ BWV1013》サラバンドにもとづく)

原曲の《無伴奏フルートのためのパルティータ》は4楽章からなる、バッハ唯一の木管楽器による無伴奏作品で、ケーテン時代の作とされる。その第3曲サラバンドは、落ち着いた叙情的な旋律が美しい。本日は演奏者による自由なアプローチのファンタジアでお届けする。

J.S.バッハ:イギリス組曲 第6番 より ガヴオット I / II

全6曲からなる《イギリス組曲》は、ケーテン時代以前の所産とされるが定かではない。第6番の第5曲ガヴオットは、単独で演奏される機会も多い。口ずさみやすい主題のガヴオット I に対して、トリオの役目を果たすガヴオット II は明るい田園調となる。

P.グラス:ファサード

反復されるパターン、そこから生まれる力強いビートとグルーヴ感。ミニマル・ミュージックの旗手と呼ばれたフィリップ・グラスが1982年に発表したアルバム『グラス・ワークス』の第5曲。2本のソプラノ・サクソと弦楽のための作品で、ジェローム・ロビンズ演出の『グラス・ダンス』でも使われた。

J.S.バッハ:フルート・ソナタ 口短調

ケーテン時代に口短調の曲として書かれ、ライプツィヒ時代に口短調に改められた。バッハのフルート・ソナタのなかでも人気が高い曲。第1楽章アンダンテは、冒頭の旋律が有名。第2楽章ラルゴ・エ・ドルチェは、心に染みわたるような主題が印象的。第3楽章は、前半のプレストから後半はアレグロのジグヘと続いて、曲を締めくくる。

作者不詳:フルートフーセ写本 II.108 より ロンドー形式のミュゼット 即興の前奏曲付き

14世紀末から15世紀初頭にかけての作品がまとめられたこの写本は、1840年に発見され、コレクターでもあった最初の所蔵者にちなんで『フルートフーセ写本』と命名された。147の歌、18の詩、7つの祈禱句が含まれており、2007年にオランダ王立図書館がデジタル化し、ウェブ上で公開した。

J.S.バッハ:イギリス組曲 第2番 より 前奏曲

《イギリス組曲》(全6曲)は、冒頭に長大な前奏曲が置かれており、この第2番の前奏曲も、他の楽章に比してほぼ倍近いボリュームを誇る。大きく3部に分けられ、トゥッティ風の両端部にソロ風の間接部が挟まれる。

C.コリア:チルドレンズ・ソング より 第1番、第4番

ジャズ・ピアニスト、チック・コリアが1971年の第1番を皮切りに、12年もの歳月をかけて完成した《チルドレンズ・ソング》は全20曲からなる連作ピアノ小品集。まるで童心にかえったかのような、新鮮な愉しさが感じられる。今回は第1番と第4番をお届けする。

G.クルターグ:J.S.B.へのオマージュ

ピアノのための小品集《ヤテコク(遊び)》は、クルターグ版《マイクロコスモス》(バルトーク)とも言ふべき教育的意義を持った作品集。1973年に書き始められ、10集まで出版されている。本曲は第3集所収の、J.S.バッハに捧げられた1分ほどの短い作品。

J.S.バッハ:フルート・ソナタ ホ長調

作曲年は諸説あるが、1741年ないしは47年とされる。4楽章構成で、第1楽章は、ゆったりとした旋律に魅力があふれている。第2楽章は、流麗な冒頭モチーフが印象深い。第3楽章「シチリアーノ」は、シチリア風という意味の古い舞曲。ためらいがちに揺らぐようなリズムが特徴的。第4楽章は澁刺とした音楽で、明るく曲を閉じる。

G.リゲティ:ハンガリアン・ロック

1978年の作。シンコペーションを含む歪なリズムがビートを刻み、そこに右手がジャズのインプロヴィゼーションを思わせる演奏を展開していく。バロック、現代音楽、ポピュラー音楽を融合したような作品で、リゲティいわく「ポストモダン風のパスティーシュ(作風の模倣)」。

J.S.バッハ:フルート・ソナタ ホ短調

ライプツィヒ時代初期の作とされる。4楽章からなり、「緩・急・緩・急」の教会ソナタ形式を採用している。バッハらしい充実した作品で、第1楽章は、哀調を帯びたフルートの旋律と通奏低音の静かな対話が印象的。第2楽章は、軽快な主題展開のあと長めの間奏部が続く。第3楽章は、通奏低音のシンプルな前奏を受けてフルートが気品を湛えた旋律を歌う。第4楽章は、澁刺とした舞曲調。小気味よい通奏低音との掛け合いが聴きどころ。